

第6回祥明大學校・熊本県立大学学術フォーラムの報告

熊本県立大学文学部長 山田 俊

韓国祥明大學校と熊本県立大学とは一九八九年に姉妹提携を結び、一九九七年に学生交流協定を締結して以来、短期研修、交換留学、或いは日本語教育実習等で長年に亘る交流を継続して来た。交流開始当初は学生間交流を主軸としていたが、近年はそれに限られず、相互に教員を派遣しての合同フォーラム等を開催し、研究レベルでの交流を着実に積み重ねて来ている。そして、これらの活動の中心には常に我が文学部が位置していたと自負している。

文学部が関わった近年の活動を記すならば以下の通りである。

- ・平成20年度 第1回学術フォーラム「日本語と日本文学をみる、二つの視点」
(祥明大學校開催)
- ・平成21年度 第2回学術フォーラム「ことばと文学」(本学開催)
- ・平成23年度 第4回学術フォーラム「韓国と日本、そしてこれから」(本学開催)
- ・平成24年度 第5回学術フォーラム「東西の言語と思想」(祥明大學校開催)

特に第4回フォーラムは本学三学部総力を上げての合同シンポジウムとして開催し、その盛会振りは未だに記憶に新しく、本学部はその一翼を担った形となっている。また私感ではあるが、この時の祥明大學校の李性範助教授による報告「文学、経済そして学際的研究」は、本フォーラムの今後の新しいテーマの可能性を示すものであった。本来は日本語教育を中心に始められた交流ではあったが、近年のこれらのフォーラムでは、可能な限り様々な領域へとそのテーマを広げるべく祥明大學校との間で調整を続けて来ている。

さて、平成25年度は、第6回学術フォーラムを「ジェンダーと女性表象」と題して開催した。これは、本学部が昨年度より取り組んでいるプロジェクト「言語・文学・文化の横断的研究」の研究テーマ「欧米・アジア・日本の文化・文学に見る女性ことばと女性表象の研究」と連携することで、韓国のジェンダーや女性に関する最新研究の動向をこの機会に学びたいという希望から企画されたものであった。

当日は、祥明大學校の二人の女性研究者及び本学部の二名の教員が登壇し、朴珠恩(祥明大學校助教授)「マーシャ・ノーマンの戯曲に描かれたフェミニスト演劇の

者としての重要な役割であると述べた。砂野は、現代の作家は全ての間人像を描き得ると思うほど傲慢ではなく、文学作品の価値は、全く違う価値を提供し、その存在の中に我々が入って行くことで、その異なる視点を獲得することを可能とすることに在る、だからこそ、フランスやドイツの文学が読まれなくなっている今日に於いて、アフリカやインド出身の作家の作品が多く世に問われているのであり、彼らの作品の世界観が閉塞した社会に別の視点を与えているからに他ならない、と述べた。朴貞姫は、文学研究者としての使命は、例えば、外国人女性受け入れに代表される異文化問題をテーマとして論述することで、社会にそうした問題を提起し、ゆっくりとした解決策を促すことであると考えている、と報告した。

今回の特別講演を拝聴し、又、パネルディスカッションの司会をしながら感じたことは、極めて月並みな表現ではあるが、今回議論となった様な問題は、不特定多数の人々の間で認識が容易に共有されるものではないということであり、だからこそ、どの様な問題がそこに潜在しているのか、或いは自分は何に対して無知であるのかに就いて自覚的にならねばならない、という点であった。時代も国も全く異なる研究領域の研究者による今回の講演及びパネルディスカッションは、その意味でまさしく相応しいものであったと言えよう。読者諸氏には、本誌掲載の報告文を御覧頂き、そうした当日の息吹の幾らかを感じて頂ければ幸いである。

尚、当日、通訳の任に当られた本学非常勤講師金敬淑先生、及び準備等をお手伝いいただいた本学部学生・院生諸兄諸姉には、この場を借りて深謝申し上げます。

二〇一三年一二月四日

諸特徴」、朴貞姫(祥明大 schools 助教授)「韓国における多文化家族の現状」、砂野幸稔(本学教授)「アフリカ文学の中の女性たち—客体から主体へ」、五島慶一(本学准教授)「芥川龍之介作品における女性表象」等の特別講演の後、同陣容によるパネルディスカッション「ジェンダーと女性表象を巡って」が開催された。

特別講演の内容は本報告をご覧頂くこととし、パネルディスカッションは講演者間の熱心なやり取りに加えて会場からも様々な質問が出され、時間の不足を恨む程であった。以下、不十部ではあるが、私なりパネルディスカッションの内容を整理して紹介しておきたい(以下、パネラー敬称略)。

五島と朴珠恩との間では「母娘関係」が話題となり、五島は現代日本の「仲良し母娘(姉妹母娘)」に代表される関係は、彼女らの内面世界では強い支柱となるが、対外的には社会的孤立を招くことになる、芥川は、当時の同様な母娘関係に介入出来ないことに対して強い恐怖を感じ、それが芥川が描く母親像に投影されている、そして、その背景には実の母親に恵まれなかった芥川の実体験が有ると推測されると述べた。これに対して朴珠恩は、アメリカにおける否定的「母娘関係」とイギリスにおける肯定的「母娘関係」の具体例を紹介し、これらの比較に加えて更に韓国の「母娘関係」との対比を今後考察して行きたいと報告した。

砂野と朴貞姫との間では、外国人受入に関する日本と韓国の異同が問題とされ、朴貞姫は、国際結婚は韓国で最も注目されている異文化問題の一つであり、国際結婚を支援するセンター等を設置して韓国は積極的対策に取り組んでいると紹介した。又、朴珠恩と砂野との間では、アフリカ文学に於ける男性と女性の描き分け、一夫多妻制の描写などを巡る応答がなされ、朴珠恩はアフリカの男性作家と女性作家の女性の描き方の違いは、従来自分には無かった興味い観点であったと述べ、砂野は、例えば、女性作家が描く場合は第二夫人を巡る問題が主題となることが多いとの例を紹介した。国際結婚を巡る問題に就いては、朴珠恩から現在の韓国は多文化家庭を積極的に取り込もうとしているとの現状が紹介された。又、パネリストの間で、フェミニズム文学としてのドイツ文学の女性の描き方が取り上げられ、朴貞姫は朴珠恩の報告を聞くことで、アメリカとドイツのフェミニズムを比較することが出来て有意義であったと感想を述べた。

後半は「文学」そのものの意義が問題となり、五島は、現実に対する個人の問題が今日の日本における「差別」の一つの在り方となっており、個人の意識と社会の意識との間の「捻じれ」を意識しつつ、その社会をどの様に描いていくのかが文学